

日本線虫学会ニュース

The Japanese Nematological Society News

目次

◆ 日本昆虫科学連合活動報告（水久保 隆之）	1
◆ 日本分類学会連合活動報告（神崎 菜摘）	4
◆ 第15回九州線虫談話会のご案内（吉賀 豊司）	4
◆ つくば大会後記（岡田 浩明）	5
◆ つくば大会に参加して①（小野 雅弥）	6
◆ つくば大会に参加して②（鈴木 康平）	7
◆ つくば大会に参加して③（富田 陸）	8
◆ 自己紹介（坂田 至）	10
◆ 編集後記	10

日本昆虫科学連合活動報告

水久保 隆之（丸和バイオケミカル株式会社）

日本線虫学会は「日本昆虫科学連合」に加盟しています。昆虫科学連合は2010年7月24日に昆虫科学に関わる14学協会を結集して発足したものです。2019年現在、日本昆虫科学連合（以下、連合）には本学会の他に下記の16学協会が加盟しています：

日本衛生動物学会 日本応用動物昆虫学会
都市有害生物管理学会 日本環境動物昆虫学会
日本蜘蛛学会 日本昆虫学会 日本蚕糸学会
日本ダニ学会 日本動物学会 日本農芸化学会
日本農薬学会 日本比較生理生化学会
日本ペストロジー学会 日本野蚕学会
日本鱗翅学会 日本 icipe 協会

●加盟の経緯と意義

加盟の契機は、2014年末頃に当時の連合の代表（多田内修九州大学特任教授、日本昆虫学会の代表）からお誘いを受けたことでした。

線虫は昆虫ではないから場違いではないとか、研究のアプローチはむしろ植物病理学に近いから植物病理学会と連合すべきだとか考える方がいるはずですが、連合の規約第2条には設置の目的が「昆虫科学および関連学問分野の研究および教育を推進し、我が国におけるこの分野の発展と社会的普及に寄与することを目的とする」と記されています。昆虫の関連学問分野を視野に入れていますが

ら、線虫も資格はあるのです。

応用動物昆虫学会（応動昆）にルーツの1つを持つ我が学会は、植物病理学とではなく、害虫学とともに歩んだ歴史があります。そのため、応動昆の大会では今でも線虫の発表の枠が用意され、多くの会員が利用しています。さらに、線虫関連研究では個体を単位にできるため、動物の生態学に基づく個体群管理の概念を害虫分野と共有していますし、線虫学会と同時期に応動昆から独立したダニ学会もこの昆虫科学連合の主力メンバーです。だからといって、これだけの理由で線虫学会が連合に加盟したわけではありません。年間一万円の会費を払うのですから、何かメリットが必要です。

それは、日本学術会議とのパイプとしての機能だろうと思います。

日本学術会議は内閣総理大臣の所轄の下にはありますが、政府から独立した「特別の」機関です。その職務は1) 科学に関する重要事項を審議し、その実現を図ること、2) 科学に関する研究の連絡を図り、その能率を向上させることです。第24期（平成29年10月～令和2年9月）の学術会議は31の「分野別委員会」に分かれて活動しています。この下の「農学委員会応用昆虫学分科会」は24ある農学委員会の分科会の一つであり、応用昆虫学・昆虫科学に関する審議を行なって活発に提言と報告を发出しています。

実は、学術会議の「応用昆虫学分科会」は「日本昆虫科学連合」と表裏一体なのです。それは、応用昆虫学分科会の設置目的に次のように記されていることから、明らかです：『・・・（前半略）・・・昆虫研究の多岐にわたる課題については、それぞれ専門とする学協会で個別に検討されており、それらを連携する組織として「日本昆虫科学連合」がある。応用昆虫学分科会は、基礎昆虫学、衛生昆虫学、農業昆虫学、

昆虫機能利用学等の分野における学問的および社会的課題の解決と研究教育基盤の充実を図ることを目的として、「日本昆虫科学連合」と連携しつつ活動する』。そのためでしょうか、毎年8月初旬に行われる昆虫科学連合主催のシンポジウムでは、学術会議の応用昆虫分科会の委員長が冒頭に必ず挨拶と活動報告を行なっています。

近年行われた提言や報告に下記のものがあります（説明しませんのでサイトにアクセスして是非読んで下さい）：

・昆虫分類・多様性研究の飛躍的な拡充と基盤整備の必要性（提言）

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-t195-4.pdf>

・昆虫科学の果たすべき役割とその推進の必要性（報告）

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-h130-1.pdf>

ここには自分たちの学問領域を守り、有利な支援を得るために利害を同じくする共通分野が連携して外部（予算を握る政府）に働きかける姿勢が見えます。小さい組織が大連合する理由は、「数」を結集して「力」とし、外に働きかけるためにほかなりません。他に線虫学会に関係しそうな農学委員会の分科会には「農学委員会植物保護科学分科会」というのがありますが、バックに学協会の連合を持ちません。なお、植物病理を全面に掲げた分科会は農学委員会には見当たりません。

学会はその学問領域で活躍する構成員がいなければ成立しません。ところが、近年構成員が所属する職場組織で厳しい逆風が吹いています。学会の学問領域が各々の職場で存続できるように手を打つことも連合組織の目的のように思えます。線虫学会としても、問題を把握して手を打ってくれる大きな組織の傘下にあ

れば何かと都合が良いでしょう。連合加盟のメリットはおおよそこの辺りにあるのではないかと思います。

日本線虫学会は上のような観測の下、連合への加盟提案を評議員会に諮り(2015.2.3)、評決しました(2015.3.25)。その後、東京大学弥生講堂アネックスホクセイギャラリーにおいて開催された、日本昆虫科学連合の2015年度総会に提案時の会長(水久保)と当時の会長(岩堀英晶氏)がオブザーバーとして参加し、総会の議題「日本線虫学会の加盟」の審議に臨み、岩堀会長が説明した日本線虫学会の活動概要を承けて、満場一致で加盟が承認されました(2015.8.1)。

●連合の近年の活動

公開シンポジウムの定期開催(毎年8月上旬)と出版並びに国際昆虫学会議の日本招致を行っています。

シンポジウムでは「衛生動物が媒介する病気と被害」における講演を中心に、計20名の執筆による「招かれぬ虫たちの話」(日本昆虫科学連合編、東海大学出版部)を上梓しています。また、このシンポジウムの続編として「昆虫の恵みⅠ」(2017)、「昆虫の恵みⅡ」(2018)、「インセクトワールドー昆虫の多様な世界ー」(2019)を開催しました。

国際昆虫学会議の招致では、招致委員会(沼田英治委員長)を設置して、京都市で第27回国際昆虫学会議(ICE)(2024年8月25日～8月30日)を開催すべく、招致活動を積極的に進めています。

●応用昆虫学分科会の活動

今期(第24期:2017年10月～2020年9月)の日本学術会議における「応用昆虫学分科会」の体制と直近の活動は以下のとおりです。

委員(10名)

委員長 小野 正人(玉川大・農)

副委員長 池田 素子(名古屋大・農)
幹事 嶋田 透(学習院大・理)
幹事 大門 高明(京都大・農)
委員 澤邊 京子(国立感染研)
委員 塩尻 かおり(龍谷大・農)
委員 志賀 向子(大阪大・理)
委員 辻 和希(琉球大・農)
委員 沼田 英治(京都大・理)
委員 深津 武馬(産総研)

・提言:「衛生害虫による被害の抑制をめざす衛生動物学の境域研究の強化」について、食料科学委員会の獣医学分科会および基礎医学委員会の病原体学分科会と共同で、平成31年4月9日に発出しました。

・種々の昆虫媒介感染症の流行が続き、リスクが格段に高まっているものの、衛生動物学の専門家は極端に減少しています。これらの問題点を踏まえて、以下の3点を提案しました:

(1) 研究拠点の形成とその活性化:衛生動物学の研究拠点として活性化が期待できる幾つかの研究機関を選定し、研究拠点として人材と設備を重点的に補充・整備するとともに、それらにおける調査・研究の規模拡大と高度化を実現する。

(2) 高等教育機関における衛生動物学の教育体制の構築と人材養成:衛生動物学の専門家の育成は、医学・獣医学・農学が連携した教育体制を構築すべきである。例えば、獣医学や農学関連の大学院の中に、衛生動物学コースを重点的に整備し、そのコースには、感染症医学、獣医・畜産学、及び昆虫学・応用昆虫学分野等の教員が参画し、衛生動物学を総合的に教育する体制を作ることを提案する。

(3) 関連組織の連携強化と国際貢献:節足動物媒介感染症を軸にした関連学会の連合体など、連携に関わる組織の構築を進め、国際的な

プロジェクトへの参加、特にアジア諸国との協力連携を強化して、衛生動物学の推進に対する国際的な責任を果たす。

以上、日本昆虫科学連合とその裏（表？）組織の応用昆虫学分科会について紹介しました。線虫学会と連合との関わり方の現状は学術会

議の応用昆虫分科会の下支え程度ですが、お願いすれば加盟団体の課題解決のためにも動いてくれる組織であろうと思います。課題ではありませんが、書籍「線虫学実験」の宣伝は、お願いしたところ連合のホームページに掲載してくれました。

日本分類学会連合活動報告

神崎 菜摘（森林総合研究所）

日本分類学会連合は、分類学全般に関わる研究および教育を推進し、分類学分野の普及と発展に寄与することを目的として国内の生物分類に関わる学協会が参加する連合組織で、当学会もその趣旨に賛同して年額 1 万円の分担金を支払って参加しています。一般向けの活動としてシンポジウムを毎年開催しているほか、提言やパブリックコメントの取りまとめ、環境や

多様性に関する政府委員会への専門家派遣などを行っています。

次回の公開シンポジウムは、第 19 回公開シンポジウム「分類学者の研究フィールド最前線」と題して、来年 1 月 11 日に国立科学博物館上野本館 2 階講堂で開催される予定です。詳しくは日本分類学会連合ホームページ (<http://www.ujssb.org/>) を参照ください。

第 15 回九州線虫懇談会のご案内

吉賀 豊司（佐賀大学）

第 15 回九州線虫懇談会の開催につきまして事前案内をいたします。

日時：2020 年 3 月 7 日（土）午後～（仮）

場所：九州沖縄農業研究センター（合志市）

※懇談会終了後、懇親会も開催します。

例年 20~30 名程度の参加があり、学生、研究者の研究紹介などを中心に行っています。現場で線虫の問題点がある方、線虫に関する研究

で意見を聞きたいという方、情報を共有したいという方の研究紹介も歓迎します。九州以外の方も大歓迎しますので、ぜひ参加をご検討ください。

なお、日程、参加申し込み等の詳細については 2 月ごろに学会 HP や NEMANETJ を通じてあらためてご案内する予定です。興味のある方はご参照のうえ奮って参加ください。

つくば大会後記

～ 第 27 回大会を振り返って ～

岡田 浩明（農研機構 中央農研）

会場の仮予約を行った約 1 年前から徐々に準備を始めました。今回の事務局メンバーは何度か大会運営を経験した者ばかりで心強く、また水久保元会長が以前のつくば大会の準備メモを残して下さっていたので、細かい点を除けば準備自体はスムーズにできたと思います。ただし、農研機構や森林総研のグループ長(室長)以上の職位の者は組織変革の結果「周辺業務」が増大して慢性的に多忙です。今後の大会責任者は年齢によらず比較的手が空いた方がやってもらえるとありがたいと思います。

私が心がけたのは、参加者の皆さんに満足してもらいたいので何か新しい企画をしたい、一方で手間暇かける自分にもメリットがあるような(研究のための新規の情報が得られるような)企画もしたいということで、ネコブ、シスト、根こぶ病をめぐるシンポを企画しました。ただし企画構成が甘く、もっと時間をかけて準備すべきだったとの思いが残ります(そもそも半日、講演者 4 名のみで扱いきれるテーマではなかった?)。

大会責任者として全体を統括し、関係者との連絡や打合せをしつつシンポの準備をする(テーマ、講演者選び、講演者との要旨、略歴、交通費などをめぐるやり取り、ポスター作成と送付など)のは正直キツかったです。シンポを企画するなら大会責任者とは別の方が行った方が良いかもしれません。例えば応動昆の小集会のように、大会主催者ではなく一般参加者にシンポの企画を募って主催してもらうのもアリかと思いました。一方で今回はポスター賞をめぐる意見交換(口頭発表も行っていただくか否

かなど)をとりまとめる作業もありました。結果的にフラッシュトークという新しい試みを導入することになり、新鮮みを与えることができたのは良かったと思います。

事務局メンバーから寄せられた注意点、反省点としては下記があります。今後大会を企画、運営する際に参考になれば幸いです。

- ・ CD-R を PC に読み込めない場合があった。USB メモリでの補完が必要か。
- ・ 公式写真を撮るべきだった。
- ・ 大会案内の 1 枚紙の地図に、コンビニとスーパーマーケットの他、飲食店(ランチ)情報も載せたほうがよかった。
- ・ シンポジウムの進行の準備不足(要旨不足や総合討論の椅子の配置)。
- ・ ポスター掲示板は 2 枚つづりのほうが良かった。スペースがあったし、ポスター発表コアタイムが偶数と奇数の 2 つだったので、偶数のつづりのほうが人がばらけて見やすかったと思う。
- ・ 役員とポスター選考委員に弁当を準備したのは良かった。役員などは外食する時間がなし、休憩時間も不規則だから。
- ・ 9 時半開始、4 時半終了、休憩時間設定は進行、運営が楽だった。おそらく参加者にとっても楽だと思う。

以上です。次回以降の大会の運営にこの記事が少しでも役立てば幸いです。

来年の龍谷大での大会を楽しみにしています。

つくば大会に参加して①

～ ポスター賞受賞のご報告と学生生活の締めのご挨拶 ～

小野 雅弥 (佐賀大学)

この度はこのような賞を頂戴し、誠にありがとうございます。中学生か高校生の頃に何かの賞をいただいた記憶がありますが、それ以来、賞というものをいただいた試しがなかったので非常に研究の励みになります。自分の研究が評価されるのはうれしいことなのだなどと改めて思いました。吉賀先生をはじめ、研究に携わっていただいた皆さまにこの場を借りてお礼申し上げます。学生生活の締め括りの年にポスター賞をいただけたことはとてもいい記念になりました。振り返ってみると、私はこれまでに合計 6 回線虫学会に参加しており(レジェンドの線虫研究者の方々に比べればまだまだです)、学会に参加し、発表を行うことは、私の中で毎年の恒例行事となりました。初参加は、佐賀で線虫学会が開催された 2013 年で、当時学部 3 年生だった私は学会の手伝いとして参加していました。“線虫”、“*C. elegans*”という単語を覚えたての右も左もわからない頃で、熱い線虫研究者の方々に囲まれ、線虫の世界への熱すぎる勧誘を受け、とてもこの世界ではやっていけないだろうと思ったことを今でも憶えています。それから、自身の研究テーマが設定され、毎日のように線虫と顔を突き合わせる日々を送るうちに、線虫を研究する魅力に気付きました。単純接触効果とは恐ろしいものです。*C. elegans* のフォームをシンプルでかっこいいと思う気持ちが芽生えましたし、線虫の世界のまだ誰も知らないことを発見したといううれしさを知ることもできました。少しずつですが、着実にステップアップしてきた私の心にも、熱いものが生まれた気がします。ただ、熱い気

持ちは内に秘めておきたいタイプの人間なので一見すると何も変わっていないように見えると思いますが、しっかりと気持ちは変化しています。このような心境の変化は線虫という不可思議な生き物と線虫学会で出会った方々に特に影響を受けた結果だと思います。様々な学会や研究会などに顔を出しますが、私は線虫学会を自分のホームだと思っています。これからも、線虫学会の方々から影響を受け続けたいですし、私も何か影響を与えていける人間になればと思います。以上で、受賞の挨拶と学生生活の締めの言葉とさせていただきます。



奈良部会長(左)とポスター賞受賞時の筆者(右)
(吉賀先生撮影)

いただいた賞状に書いてある“若き線虫学者”という言葉、素敵です。周りから言ってもらえて初めて自分が“線虫学者”であることを自覚

しました。未永くポスター賞が続いて欲しいと思います。ただ、受賞時に頂いた花の冠

はちょっと恥ずかしかったです。しばらくの間、被らされました。

つくば大会に参加して②

鈴木 康平 (三重大学)

三重大学生物資源学研究科 M1 の鈴木康平と申します。学部時代は龍谷大学の線虫学研究室の岩堀英晶先生、現在は三重大学森林微生物学研究室で松田陽介先生の下で研究を進めております。実は線虫学会ニュースに原稿執筆させていただくのは、第13回九州懇談会の参加に続いて2回目となり、このような機会を再び頂けることに感謝申し上げます。

さて最近の線虫学会では年々、学生の参加者数も増えているようで、現在の研究室に線虫をテーマにする同期がいないだけに寂しがり屋の私はこの学会をとっても楽しみにしていました。しかし、今回は初めてのポスター発表に加えて、フラッシュトークという新しいシステムも追加され若干不安を感じておりました。そのため、緊張しながら会場に着きましたが、中に入ってみると見覚えのある方が多く、前回の学会でお話させていただいた方々と久しぶりに話すことができ、すぐに緊張をほぐすことができました。

今回の研究発表では、スギ地上部の異なる器官、基質に分布する線虫の群集構造について調べました。地上部に生息する線虫群集は器官や基質ごとに異なっていたことから、生息環境によって線虫は収斂するのではないかという論考をいたしました。この論考についての質疑では、高いところにある基質では、線虫が風や何かしらの昆虫を媒介として移動した可能性はあるかという意見も頂きました。



図1. 著者のポスター発表の様子(予想外に多くの方が聞いてくださり、内心緊張していました)

フラッシュトークでは、短い時間の中で伝えたい内容を簡潔に伝えることが求められるので、実験方法などの細かい説明は省いて統計解析の図の概略を主に話させていただきました。5分間に設けられていた発表時間は、長すぎず短すぎず発表者にとって話しやすく、みなさんにとっても聞きやすい時間ではなかったかと思えます。

ポスター会場はゆったりとした雰囲気、アットホームな感じでとても話しやすかったです。そして発表に際しては、思っていた以上に多くの方に興味を持っていただくことができました(図1)。ただしその分、上手く説明が出来ないところも多々あり勉強不足を感じるとともに、今後の新たな課題も見つかりました。

学会で成果を発表させていただくことは、たくさんの研究者の視点に立って自身の研究を見つめ直す絶好の機会になるばかりでなく、考え方の幅を広げることができる勉強の場になりました。私の研究に興味を持ち、アドバイスをくださった方に改めて感謝を申し上げます。

最後になりましたが、今回の発表では若手研究者ポスター賞を頂きました(図2)。これを励みにこれから一層研究に力を入れてまいりたいと思います。そして参加者の一人として本学会を盛り上げられるよう精進してまいります。



図2. 著者の表彰時の様子(賞状や花飾りなども頂き、とても嬉しかったです)

つくば大会に参加して③

富田 陸 (明治大学)

はじめまして、明治大学農学部4年の富田陸と申します。私たち明治大学の植物線虫学研究室は新屋先生の着任後3年目となり、人数も増えたことでより一層賑やかになっております。研究室は学生ですし詰め状態になることもあり、熱気と活気に溢れています。いつでも研究にアツイ新屋先生をはじめ、頼りになる先輩方や同期のメンバー、個性的な後輩たちと共に精神的にも物理的にも近い距離感で日々研究に励んでいます。そんな明治大学植物線虫学研究室ですが、この度の線虫学会大会では8演目を掲げて大会に臨ませていただきました。私も発表者の1人として線虫の乾燥耐性に関するテーマで線虫学会に初参戦させていただきました。この度は寄稿の機会を頂きましたので、第27回つくば大会の振り返りをさせていただきます。

観覧も含めて学会に参加することが初めてだった私は、まだ見ぬ「学会」という舞台の雰

囲気に緊張と期待を膨らませておりました。聞き覚えのある著名な研究者の方々と同じ場所で発表できる機会ということで大変胸を躍らせていましたが、発表された大会プログラムを見ると初日のトップバッターに自分の名前が…。戸惑いとプレッシャーを覚えながらも、研究室のメンバーに勇気付けられたりしながら発表当日の朝を迎えました。当日は研究室メンバーとの待ち合わせに失敗したり、予期せぬ機材トラブルに見舞われたりすることもありましたが、運営の方々に臨機応変に対応していただき、なんとか発表することができました。発表を終えてみると自分の研究について知っていただけるだけでなく、様々な質問やご意見も頂けて、学会で発表することの重要性を実感できました。振り返ってみるとトップバッターを務めたことも非常に光栄なことだったと感じています。

日中の発表以外でも様々な研究者の方とお

話をさせていただく機会があったことは貴重な経験になりました。先輩方に事前に伺っていた通り線虫学会はとてもアットホームな雰囲気、文献等で名前を拝見したことのある先駆者の方々とお話をさせていただく機会がありました。2日目の懇親会ではお酒を飲みながら気さくにお話を頂き、非常に勉強になる楽しい時間を過ごすことができました。発表についても「良かった」というコメントや今後のアドバイスを頂いたのは自分自身大変嬉しく思い、今後の励みになると感じております。またお話の中で、普段ご指導いただいている尊敬する新屋先生の昔話を伺うこともあり、思わぬ収穫もあったなと思っております。懇親会では1人1人自己紹介の場が設けられていたことには少々驚きましたが、新参者にも優しい暖かい空気を感じとることができ、非常にありがたく思いました。

加えて他大学で研究している学生の方々と交流を持つことができました。日本国内では数少ない線虫に携わる同年代の学生と接する機会は貴重であり新鮮に感じられました。3日間を通して食事の場だけでなく、時には入浴しながら話をすることもありました。互いの研究のことだけでなく、先輩方には進路相談をさせていただくこともありました。こうした機会を通じて離れた場所で同じように研究に励んでいる仲間の実感することができました。このような関係に刺激を受けることで、次の学会等では他の学生にも負けないような面白い成果を報告できるよう、日々の研究により一層尽力していきたいと思いました。新たなモチベーションを得ることができるのも学会に参加する利点の1つであると感じました。明治大学からは学会初参戦のメンバーも多く刺激的な毎日でしたが、終わってみればあっという間の3日間でした。この度の演目の他にも明治大学

では分野の枠に囚われないユニークなテーマの研究が日々行われています。今後も論文、学会等でよりよい成果を報告できるよう、明治大学植物線虫学研究室一同、より一層精進して参ります。



懇親会にて自己紹介をする研究室メンバーと筆者（右）



研究室の愉快的仲間たち

最後に新米研究者を温かく見守ってくださる研究者の皆さま、普段よりご指導いただいている先生方各位、並びに今大会運営に携わっていただいた皆さまにこの場を借りてお礼申し上げます。貴重な経験を積ませていただきまして、誠にありがとうございました。これからも何卒宜しくお願い申し上げます。

自己紹介

坂田 至（農研機構 北農研）

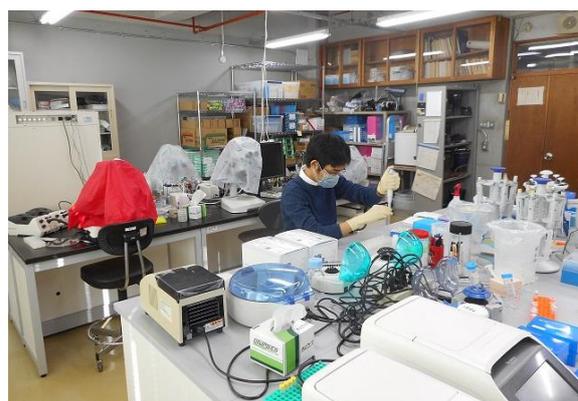
農研機構 北海道農業研究センター 線虫害グループの坂田至と申します。線虫学会には2017年より参加し、2019年度からは庶務幹事も務めております。今更ではありませんが、原稿執筆の機会を頂きましたので、自己紹介をさせていただきます。

現職に配属される前は、千葉大学でアリとアブラムシの共生関係に関する研究を3年間(学部4年～修士2年)行っておりました。具体的には、アブラムシ体表の脂質成分に着目し、アリが共生者であるアブラムシを認識する機構を明らかにする、というもので、体表脂質成分の分析や分画、アリを用いた行動実験などを行っていました。昆虫の研究から足を洗った今でも、圃場で見慣れないアブラムシを発見するとアリがついていないか確認してしまいます。

現職には2017年4月より配属となりました。北海道にはそれまで一度も来たことがなかったため、気候の違い、読めない地名、デカすぎる畑と農機具、野生のヒグマとの遭遇(知床に出張中にて)など、驚きの連続でした。また、大学では線虫について学ぶ機会がほとんど無く、植物病学の授業で軽く説明を受けただけで、

生体を見たことすらありませんでした。さらに、PCRをはじめとした分子生物学実験も未経験でした。したがって、配属1年目は生活面でも仕事面でも初めて尽くしであり、何かと落ち着かない1年だったと記憶しています。

現在はジャガイモシロシストセンチュウの防除技術・検出技術の開発に務めているほか、線虫の遺伝子応答やシストセンチュウ種間の生態的な違いなど、小ネタ的な研究テーマにもいくつか取り組んでいます。大会などで皆さまと研究内容についての議論ができれば幸いです。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



実験中の筆者

編集後記

◆今年個人的に最も印象に残ったニュースと言えば、八村塁選手がドラフト1巡目9位指名でNBA入りしたことでしょうか。現在、八村選手はワシントン・ウィザーズの中核メンバーとしてプレーしており、期待以上のパフォーマンスを發揮しています。来年の東京オリンピックでも間違いなく日本代表の柱としてさらなる活躍を見せてくれるでしょう。今年中国で開催されたFIBAW杯では日本代表はことごとく列強に屈し、お世辞にも健闘したとは言えない結果となってしまいました。東京五輪では一回りも二回りも成長した八村選手や渡邊雄太選手(メンフィス・グリズリーズと2way契約中)らが日本代表を率い、対戦国に一矢報いるような試合が見られることを期待しています。(村田)

「フジワラ」の線虫関連機器

パーリング法によって線虫を分離
線虫分離装置



シスト線虫の分離に
シスト分離装置



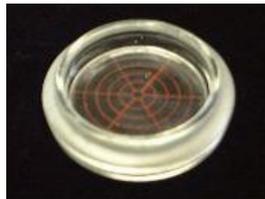
裏表両方から視察できる
H-Sスライド



表層土壌の線虫採取に
線虫スコップ



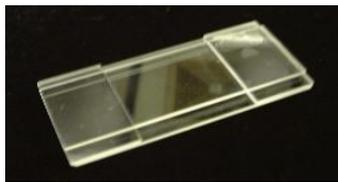
線虫の計数に便利
シラキース時計皿



線虫の保存に
線虫固定皿



1ml 中の線虫計数に
線虫計数板



安価に計数したい方は
プラネット格子枠付スライド



長時間の視察にも目に優しい
シスト計数皿



株式会社 藤原製作所

〒114-0024 東京都北区西ヶ原1-46-16

Tel 03-3918-8111 Fax 03-3918-8119

E-Mail info@fujiwara-sc.co.jp

☆詳しい情報はホームページで! → <http://www.fujiwara-sc.co.jp/>